論文審査の結果の要旨及び担当者

報告番号	博(経)甲第　1　号	氏　名	大 戸　武
論文審査担当者	主査　菅　家　正　瑞 副査　杉　原　敏　夫 副査　田　口　信　夫		

題名：日本の地方銀行における貸出業務の収益力分析

論文審査の結果の要旨

1.本論文の問題意識：本論文の根底に流れている問題意識は、地方銀行（以下「地銀」と言う）における 1990 年半ば以降の貸出業務の収益力の低減傾向と赤字化に対する構造的要因の認識である。申請者は、この構造的要因は地銀の経営能力にあり、経営能力を貸出業務における合理的貸出意思決定能力として捉え、収益性を向上させる貸出採算管理や地域性を反映した貸出業務の合理化を追求しようとする。

2.本論文の研究目的：上述の問題意識から、本論文の研究目標は次の 2 点に絞られる。
①地銀における貸出業務の収益力分析とその向上策。
②地銀における貸出業務における地域性の分析とその活用。
前者においては、地銀の貸出業務における合理的意思決定の不備という仮説の下、貸出業務に関わる意思決定諸要因をパラメータとし、効率性を指標とする多面的な実証分析が行われる。ここでは、合理的貸出意思決定の必要性とその方式の方向性が打ち出される。
後者においては、地銀における貸出収益力の格差にいかなる地域特性要因が影響を与えているのかという問題に関する実証分析が行われる。ここでは、従来より意識されてはいたものの必ずしも本格的・具体的に検討されて来なかったと思われる研究領域に、新たな一石を投じるものであると言えよう。
前者は地銀内部における貸出業務における採算性の必要性とその方式を指摘しているものであるのに対し、後者は地銀外部における貸出業務における諸要因の分析と評価を行っているものであり、共に地銀における貸出業務における合理化の必要性とその対応策を総合的に考察しているものと考えることができる。

3. 本論文の構成：以上の研究目的を達成するため、本論文は以下のような構成になっている。

序章　本稿の目的と構成

第 1 章　地銀の貸出業務の課題

第 2 章　銀行業の効率性分析が抱える諸問題

第 3 章　地銀における貸出業務の収益力評価

第 4 章　地銀における貸出業務の収益力格差の発生要因

終章　結論

序章では、その題名が示すとおり本稿の目的と構成の概略が述べられている。

第 1 章では、1990 年代後半からの統計データをもとに地銀貸出業務の収益性の継続的低迷を明らかにし、その主要原因として信用コストに見合った貸出金利プライシングを実現してこなかった銀行経営の不備を指摘する。そこから、地銀の基本的ビジネスモデルとしてリレーショナルバンキングを置き、その立場から信用コスト管理の高度化の方向に向けて貸出金利設定の必要性を指摘する。

第 2 章では、第 1 章の主旨を基本に、効率性分析の研究分野を銀行業務へ適用する場合の問題点を明確化し、第 3 章でまとめる効率性分析への方針を提示する。方針は次に示す 4 点に集約される。

①銀行は市場における価格支配力を有し、プライスセッターとして行動する。

②アウトプットについては貸出収益力の成果を表すフロー変数を採用する。

③効率性の推計方法としては DEA（包絡線分析）を採用する。

④不良債権の扱いについては、それを含む信用コスト全体をインプットとする。

第 3 章では、第 2 章で設定した分析方針の下で効率性分析を実施した結果について、「技術的非効率（経営努力）の効率値への影響度」、「効率値と地域シェアとの関連」、「経営規模と効率値との関連」の 3 点から結果を示している。なお、信用コストにおけるスラックの重要性を認識することで DEA における SBM モデルを採用し、貸出業務の収益力は不良債権処理に伴う信用コストのスラックから大きな影響を受けていることを明らかにしている。

第 4 章では、地銀における貸出業務の収益力を差別化する要因として地域性をとりあげ、その実証分析を行っている。分析手法としては第 3 章で示された貸出業務の効率値を被説明変数、地域性を規定する要因を説明変数とした重回帰分析を行い、地元都道府県向け貸出比率、地元都道府県における第二地銀以下の貸出比率が積極的な要因として挙げられている。

4.本論文の評価

本論文の研究目的は、地方銀行における貸出業務の収益性・採算性の継続的な低迷に対する構造的要因の追求とその対策の究明である。また、本論文における特徴として、①対象領域についての評価方法としての DEA の適用、②新たな分析要因（スラックの取り扱いとそれを可能にした SBM）の導入、③地域性という多角的要因の設定と評価、が挙げられるであろ

う。データからも示されるように地銀の貸出金残高はここ 10 年間ほぼ一定の動きを見せているものの経常収益、貸出金利息は一貫して逓減の傾向で推移し、大きな問題事項となっている。申請者の問題意識はその構造要因の解明と今後の戦略展開に向けての方向を示唆したものであり、地銀経営に向けた本論文の知見は明快でありかつ大きな意義を持つと考えられる。

構造要因の解明のために用いられている効率性分析手法は DEA を主体とするものであるが、その効果的な利用及び不良債権処理における経営スラックの導入や感度分析などの DEA の最新手法を適用した推計方法など、問題設定、手法の適用、評価法などに新規性が見られる。特に、経営スラックについては収益性評価において見過ごすことの出来ない重要なものであるが、通常の CCR，BCC モデルにおいては扱うことが不可能である。本論文では、それを意識的に取り込んだ DEA の最新技法である SBM モデルを導入して、地域シェアと効率値、規模と収益力との関連性の分析も行っている。前者においては、双方に高い負の相関があること、また後者においてはリレーショナルバンキングの特徴を計量的に実証した興味ある結果が得られている。

さらに、効率値を被説明変数とした重回帰分析による実証分析においては、貸出業務についての総合的な指標のもとでの地域性因子の評価がなされることになり、地域性因子の評価において新たな視点を与えているものと考えられる。特に、リスク管理債権比率の回帰係数の評価により地銀が貸出の信用リスクに見合ったプライシング・収益を十分に実現できていないこと、及び地元都道府県における第二地銀以下の貸出比率の回帰係数の評価による地銀の地元での存在感と貸出業務の収益力の低下という関連性は、地銀の地域戦略についての再検討と今後の地域戦略に対しての具体的方策を暗示しているものとして非常に興味深い内容を有していると思われる。

終章では、本論文のまとめと今後の方向性が述べられている。

なお、同時に提出された参考論文は本論文の土台を形成している。

総括すれば、本論文は申請者の設定した仮説のもとに研究目標が設定され、明確な展開シナリオと最新の分析技術を駆使した実証分析により明快な検証がなされていると解される。最終結論においては、検証と同時に地銀の今後の地域戦略の展開に対して有用で興味ある結果も得られていることも評価に値すると思われる。

以上のように、本論文は今後の地銀経営に貢献すること大であり、本審査委員会は全員一致で博士（経営学）の学位に値するものと判断した。

以上